

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○デルフィニウムの栽培管理 ○ばらの冬季の温度管理 ○シクラメンの播種 ○花き類の防寒・省エネ対策 <p>< ‘さくらひめ’ 一切り花 ></p> <p>9月中旬に定植した ‘さくらひめ’ 等のシネンシス系デルフィニウムの生育ステージは1番花の開花期になる。</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>採花中は少量かん水とし、土壌表面は乾燥気味とする。80%程度採花後は十分にかん水し、土壌を乾かさないう定期的にかん水して2番花の萌芽を促す。</p> <p>施肥は1番花の収穫が終了した時点で有機配合肥料(チッ素成分5~6kg/10a)を施用する。</p> <p>イ 温度管理</p> <p>生育を促進させるため、夜温は10℃を確保する。昼温は25℃を目安に管理し、側窓換気や循環扇を活用して植物体に風を当て、高品質切り花に仕上げる。</p> <p>ウ 採花、出荷</p> <p>採花の目安は、全体の70~80%が開花した頃である。採花後はすみやかに水に漬け、萎れを防止する。</p> <p>花散り防止のため、エチレン合成を抑制する前処理剤(STS)を使用する。</p> <p>段ボール箱での出荷時は、萎れ防止のためエコゼリーなどの給水材を利用する。</p> <p>エ 電照</p> <p>12月から電照を開始し、日長延長により生育を促す。LED球(赤色)で17:00~19:00の2時間、白熱球で17:00~21:00の4時間を目安とする。</p> <p>< ‘さくらひめ’ 鉢花 ></p> <p>‘さくらひめ’ は草丈が伸びやすい特性があり、鉢物用として草丈50cm程度に仕上げるため次の点に留意する。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) ばらの冬季の温度管理</p>	<p>ア かん水、施肥管理 日照量が多いと萎れやすいため、乾かさないようにかん水する。肥料が切れると葉が黄化するため、I B化成肥料を4号鉢で毎月3粒/鉢施用する。</p> <p>イ 温度管理及び摘心 ○10月下旬に4号鉢に定植し3月に出荷する作型では、地際部から1cmの高さで摘心し、12月より最低温度5℃で管理する。 ○4月に出荷する作型は、3月出荷用と同様に摘心して無加温で管理する。</p> <p><エラータム系一切り花> 9月下旬に定植した‘パルフェライトブルー’等のエラータム系デルフィニウムの生育ステージは1番花の開花期になる。</p> <p>ア かん水、施肥管理 かん水、施肥管理は‘さくらひめ’に準じる。</p> <p>イ 葉かぎ 発蕾期からは、次の芽の分化・発達を促すために徐々に葉かぎし、株元に光を当てる。最終的に、地際部から15～20cmの高さは葉かぎする。</p> <p>ウ 温度管理 花茎の伸長を促すために、夜温12℃を確保する。昼温は25℃を目安に管理し、側窓換気で植物体に風を当て、高品質切り花に仕上げる。</p> <p>エ 収穫、出荷 全体の70%が開花した時に採花する。採花後はすみやかに水に漬け、萎れを防止する。 花散り防止のため、エチレン合成を抑制する前処理剤(S T S)を使用する。</p> <p>ばらの好適温度は品種によって異なるが、夜温は16～20℃、昼温は23～27℃を目安とする。実際には複数の品種が同一温室内で栽培されているため、夜温18℃、日中25℃の温度で管理すると良い。 多くの品種は、夜温が16℃より低くなるとブライント枝(蕾を着けない枝)の発生増加や、到花日数が長くなり収量が減少</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) シクラメンの播種</p>	<p>する。さらに、低温下ではブルヘッド（花の中に花が咲く）やブラックニング（花弁の黒色化）等の奇形花が発生するため、適切な温度管理に努める。</p> <p>中鉢（5号鉢）で、翌年の年末出荷を目標とする場合は、12月中旬に播種する必要がある。播種には200穴のセルトレイを用い、用土は市販の培養土（メトロミックス、プラグミックス等）を使用する。</p> <p>種子は、次亜塩素酸ソーダ5%に3時間浸漬する。消毒後、一昼夜流水洗浄処理してセルトレイに1粒ずつ播き、5mm程度覆土する。</p> <p>シクラメンの種子は嫌光性であり、発芽まで暗黒条件化で管理する。播種したトレイを数段に重ね、シルバーポリ等で被覆する。発芽適温は18℃（15～20℃）で、播種後25日頃から発芽する。なお、25℃以上の高温条件下では発芽障害が起こり、10℃以下では発芽率が低下するので温度管理には十分気を配る。</p> <p>発芽を確認後、被覆を取り除いて、セルトレイをベンチに広げる。寒冷紗下で1週間程度順化し、最低夜温15℃程度で管理する。</p>
<p>(4) 花き類の防寒・省エネ対策</p>	<p>急激な寒さに備え、施設栽培における防寒対策は次の事項を参照する。</p> <p>ア 温室を総点検し、補修と目張りを行う。内装カーテンは二層被覆とし、放熱を防ぐ。ただし、気密性が高まると湿度も高くなるため、べと病や灰色かび病の発生に注意する。</p> <p>イ 寒風が植物体へ直接当たらないよう、温室の風上に防風ネットを設置する。</p> <p>ウ 温室内の北側側面や妻面等、日射の影響が少ない壁面に光を反射する資材を設置する。これにより隙間からの放熱を防げ、反射光を有効利用することができる。</p> <p>エ 温度ムラを少なくするために、循環扇の設置や温風暖房機のダクトの配置及び風量を調節する。</p>

(作成 農林水産研究所)